校長先生へ
３年担任へ

過日は、お世話になりました。
研究会で無事に役目を果たすことができました。
ありがとうございました。
島小での授業を録音から書き起こしました。（筆録にする）
この筆録と再現授業の元の鈴木佑治先生の筆録と比べて見ました。
授業は、手順・手続きが大事だなと思いました。
また、語りの部分は、話芸です。落語からその話芸、特に間を学ぶようにと、鈴木先生は勧めておられたようです。
お礼に資料を同封します。

例会では、まず、各自の案を出しあいながら、案を検討してみました。それから、鈴木佑治先生の筆録を輪読しました。その後の検討会で、
１　詩の扱い
・跳び箱セットを絵にすることで、臨場感が出る。（静）
・その絵の中に動きが生まれる（動）
・アップの画面、スローモーションの画面で心の変化が見えてくる。
・説明でなく、詩情を感じさせることにつながる。
２　具体的な指導の流れ
（１）まず、題を手がかりにして考える。（題目の扱い）
・　鈴木先生は、題名を書く代わりに「跳び箱」を描かれる。
　これで、授業準備（跳び箱）が始まり、臨場感が生まれる。
・　跳び箱セットの準備の仕方も、手続きに工夫がある。
・　準備が完了したら、この詩を書いた人物を登場させている。
　ここまでが、題目の扱いになる。
＊私の授業では、跳び箱セットを扱うときに「マット」についての問い方に手落ちがあった。踏み切り板を扱った後、「こちら側に」という具体的な指示が落ちていた。だから、「とんだ人」という応え方が出てくるのである。
そこで、臨機応変に人物を描いてみることもあったなと、後で気づいた。
（２）この詩の生まれたもとを扱う。（ひびきの扱い）
・　詩を読んで、印象に強く残ったことを整理する。
・　跳び箱を跳べた喜びが、この詩の種である。

・　それを具体的に、映像的に扱うことが指導の要点になる。

そこで、作者の想定が、大事である。この子は、跳ぶだけの体格、体力、気力も備えている。一つだけ足りないものに気づいたから跳べたと読む。

・　人物像を言葉で説明したのでは、詩にはならない。
　　それを、鈴木先生は動きで問っているので、映像化できる。

（３）この詩を視写して、より味わう。（手引きの扱い）

・　この詩の喜びを考えながら書かせている。
　　（視写は、最もていないな読みの活動でもある）
　　（師弟共に視写するのが自然であり、次の活動にスムーズにつながる）

（４）板書された詩を全員で音読する。

・　視写中は、静的な活動である。
　　全員で声を揃えて読む活動が、気分転換にもなり、集中を高める契機にもなる。

（今回、気付いたのですが、子ども達の座席が広がり過ぎていると、声を揃えるのが難しい。もう一つは、座席の位置が少し前過ぎる。教卓と児童の席との間が狭すぎると全員の顔が一望できない。これは、子ども達を掌握するためにも、教師自身が安心できるためにも、全員の顔を見えるということが大事である。これは、多くの学級で授業して気付いた点もある）

（５）板書をもとにしての話し合い。最初に、難しい言葉を確認する。

・　意味の分からない言葉はないかと、子どもの自覚を高める問いがよい。
・　子どもから出なくても、扱いに関係のある言葉は、教師の方から確認する。
　　今回は、不安を取り扱っている。

（ここの扱いを、私は失敗している。表情（ロ）をここで扱えばよかったのに（２）で扱ってしまった。そこでは、もう少しラフな扱いでよかった）

・　文を切って考えると、考えやすくなる。心の変化で２つに分けている。
　　（検討会では３つに分けて考えるという意見が多かった）

（６）詩の生まれたもと、作者の喜びを扱う。

・　跳べたもとは何かと問い、言葉と事実（跳べたと喜び）を結びつける。

（７）授業を振り返り音読して終わる。

このとき、最初に全員で読んだときより、子ども達の声に変化が出るものである。今回も、録音を聞くとその変化が感じられるが、席の広がりがその効果を弱めているように感じた。

暗唱に挑戦してくれた子が、出てきてくれたことが素晴らしいと感じた。子ども達の意欲的な態度に感心した。鍛えがいのある子ども達である。

思いつくまま、記しました。参考になれば幸いです。今後もよろしくお願いします。